

双生児にみられる兄弟的性格差異と家庭での取扱い方*

— 双生児研究 その二 —

東京大学教育学部 三 木 安 正**

同 天 羽 幸 子

I 問題と被験者

われわれは、さきに、素質を同じくすると考えられる一卵性双生児（E Z）の対偶者間にも性格的差異があることを問題とし、これを兄的な性格と弟的な性格という見地からしらべてみたところ、普通の兄弟の間にみられる兄らしさ弟らしさと同様な差異をE Zの兄弟の間にも認めることができ、その兄弟的性格特徴の若干をつかみ出すことが出来た。***

そこで、そのような兄弟的性格差異の生ずる原因を家庭、社会等における兄弟的な差別的取扱ということと、両者の間の体力、知的能力、あるいは生活経験の差異などによる力関係、ことに依存関係ということの二つの面から考えてみたいと思つたのであるが、本稿は前者についての一考察である。そして、その際、双生児に対しても兄弟の序列をつけているということが、わが国特有の封建的家族制の遺風で、西欧諸国には余りみられないものであるといわれるので、もしそうしたことが、性格形成に影響をもつものとすれば興味ある問題であると考えたわけである。

そこで、まず、家庭における兄弟的な差別的取扱の程度をしらべなければならぬが、それには次第のような方法によつた。

また、この研究の被調査者は東京大学附属中学校に昭和 28 年度入学したもの及び昭和 29 年度入学志願したもの（当然入学したものを含む）E Z 男子 37 組、女子

29 組、卵性不明とされたが後に E Z ではないかと考えられているもの男子 1 組女子 1 組である。

II 家庭における兄弟的差別的取扱の方の調査

直接、親に当つて、あなたは二人の子を育てるのに一方を兄として、一方は弟として、区別をつけて扱っていますか、と質問することも、むろん無意味ではないが、それだけでは、実際と相異している場合があるので、できるだけ日常生活で取扱の方の差別が具体的にあらわれるような場面を考え、その取扱の方の差がおのずから兄弟的差別的取扱いを示しているようなものをもとめた。

なお、こうしたしらは、質問紙の他入学時の面接、家庭訪問、子供に対する調査などでも行つたので、そうした項目も入っている。

考えられた調査事項は次のようなものである。

1. 取扱いにおいて兄弟の差別をつけているかということ直接的に質問する（父、母それぞれに）
2. 家庭で入浴とか食卓につく位置とかに一定の順序があるか（一般的にその家庭の傾向をみるため）
3. 何かにつけて兄の方を立てようとするか
4. 二人が喧嘩をしたとき、兄さんだからとか弟だからといって叱つたり、なだめたりするか
5. 幼時の授乳の順
6. 幼時の入浴の順
（以下現在）
7. 朝起す順
8. 食事、おやつを盛る順
9. 同時に二人を呼ぶときの順
10. 他人に二人を紹介するときの順
11. 大切なお使いはどちらにたのむか
12. ちよつとしたお使はどちらにたのむか
13. 大切なことを相談するのはどちらか
14. 現在頼りになるのはどちらか

* On the relationship between personality differences of identical twins and their treatment by the family. この研究は、文部省科学研究費・双生児研究班の研究の一部である。

** by Miki, Yasumasa (University of Tokyo)
Amō, Yukiko (University of Tokyo)

*** 三木、木村：兄的性格と弟的性格，教育心理学研究，第2巻第2号

15. 将来はどちらに期待しているか
(以下本人に)

16. 喧嘩のとき兄だから弟だからという叱られ方をするか

17. 子供からみて親は兄弟的差別扱いをしていると思うか

18. 本人の兄弟意識 (S. C. T. 等による)

こうした質問にたいする回答の一般的傾向は、

1. 親に対する直接質問では、兄弟的差別的取扱いはないというものがはるかに多い。すなわち父の場合は 差をつけない 42, 差をつける 22, 無記 4 で母の場合は 差をつけないが 46, 差をつけるが 22 となつてゐる。これに対して子供との面接によつて子供からみて親は兄弟的差別をつけて扱つていゝと思うかという質問については、全部の子供にあたることは出来なかつたが、兄と弟に分けてみると、兄の方では回答数 50 のうち差別をつけていないとするもの 28, 差別をつけているとするもの 20, 疑問 2 で、弟の方では回答数 43 のうち、差別をつけていないとするもの 24, 差別をつけているとするもの 18, 疑問 1 で、兄弟共同様の傾向であり、差別をつけていないとする回答の方がやや多いが、親の回答とくらべれば差別をつけられていると思つてゐるものが多い。

2. 家庭で入浴や食卓につく位置が一定か、という点では一定でないものがはるかに多い。すなわち、不定 47, 一定 19, 無記 2

3. 何かにつけて兄を立てようとする、については、否定がはるかに多く 48, 肯定 2, 疑問 2, 無記 11 である。

4. 喧嘩の時の叱り方では、兄だからというような云い方をしないというのが 50, するというのが 14, 疑問 1 無記 3 であるが、子どもの方からいわせると (16) 兄の方の回答数 44 のうち肯定 23, 否定 21, 弟の方の回答数 41 のうち、肯定 19, 否定 22 で、その率において親の云い分とは非常にくいちがつてゐるのは面白い。

5. 幼時の授乳の順は、平等にが 36 で、わからないが 20, 無記が 5 で、兄がさきというものがわずが 7, しかし弟がさきというものは一つもない。

6. 幼時の入浴の順となると、わからないがうんと多くなつて 38, 平等にが 15, 無記 3 で、兄を先にというものが 12, 弟を先にというのではない。

7. 朝起す順は、同じにが 42, わからないが 12, 無

記 1 で、兄を先にが 9, 弟を先にが 4 となつてゐる。弟をさきにがでてきたのは、朝おこすのはつらいからだろうか。

8. 食事、おやつを盛る順は、わからないが 35, 平等にが 24, 兄からさきが 7, 弟からさきにが 1 となつてゐる。

9. 同時に二人を呼ぶときの順は、兄がさきに 34, 弟がさきが 5, わからないが 16, 平等に(かわりがわりさき)が 11, 無記 2 となつてゐる。

10. 他人に二人を紹介する場合にはどうしても兄がさきになると思われるが、やはり兄がさきが 36, 平等にが 12, わからないが 19, 無記 1 で、前項とちがつて弟がさきというものはない。

11. 大切なお使いはといつても、その程度によるが、結果は、兄にが 25, 弟にが 9, 平等にが 24, わからない 8, 無記 2 である。

12. 前項に対して、ちよつとしたお使いではどうかというと、弟の方が多くなつて 19, 兄は 12, 平等にが 24, わからないが 11, 無記 2 であるから、弟の方はやはり軽くみられていることになるうか。

13. 大切なことを相談する場合は二人を一緒にするのが当然と思われるが、結果もその通りで平等にが 38, 兄が 11, 弟が 2, わからないが 14, 無記 3 となつてゐる。

14. 現在頼りにしてゐる方はどちらかとの問に対しては、そうした区別をつけないで平等にみようとしてゐるのが 38, 兄が 11, 弟が 4, わからないが 11, 無記が 4 で、これはそれぞれの實力とも関連しよう。

15. 将来はどちらに期待しているかという問いに対しては、同じようにと答えたのが 36, 分らないが 10 無記が 9 であるが、兄と弟とでは、兄の方が 11, 弟の方が 2 となつてゐる。兄の方に期待するという方が多いのは、実際に頼りになるからか、あるいは兄という資格によるのであろうか。

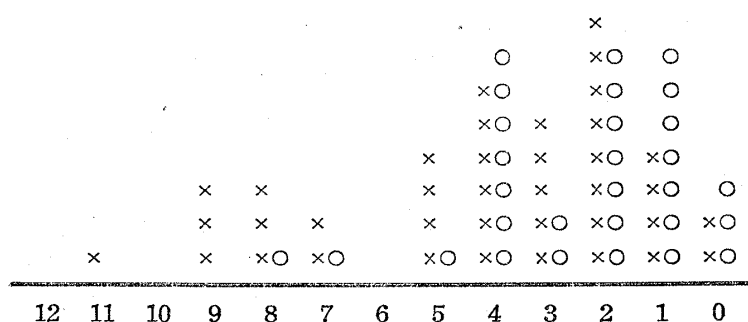
問題 16 は 4, 17 は 1 参照

18. 本人の兄弟意識は、主として、S. C. T. などによつてしらべたのであるが、兄の方で兄弟意識をもつてゐられるもの 47, 然らざるもの 18, 疑問 1, 無記 2, 弟の方では、意識ありと思われるもの 44, 然らざるもの 21, 疑問 1, 無記 2 で、肯定否定については兄弟間で大体一致してゐる。

結果は以上のようなものであつたが、そのうち家庭の兄弟的取扱いの差異をみるのに役立つと思われるものとして、前記問題のうち、1, 3, 4, 6, 7, 8, 9,

Fig. 1

×……男 N=38 ○……女 N=30



10, 11, 12, 13, 14, 15, 17 の項目をとり、双生児の各対につき、取扱い上の兄弟的差別を肯定する項目数の合計をとつて、一応、差別的取扱いの濃淡をあらわすものとした。

そうした合計点についての分布をみると第1図のようになる。

これで見ると、家庭においての兄弟的取扱い上の差別は男子の方にやや強くみられるようである。

III 兄弟的性格差異の大きさの決め方

次にE Zの対偶者間にみられる兄弟的性格差異の大きさをみるために、第一報告で、兄弟的性格差異が顕著にみられた項目10を選び、各対について、本人(2人)と母の判定において、その差異を肯定するものの合計点を差異の大きさの指標とした。すなわち最大の場合は30点となるわけである。

10の項目は次のようなものである。

2. どちらがおしやべりですか (弟)
5. なにかする時に人の迷惑になるかどうかをよけいに考えるのはどちらですか (兄)
16. もつと遊んでいたい時でも、やめなければならない時には、すぐやめるのはどちらですか (兄)
17. 人におだてられると、すぐ調子にのりやすいのはどちらですか (弟)
21. 少しでも困ることがあると人にたよろうとするの

はどちらですか (弟)

22. 外にでて遊んだり、さわいだりするの
が好きなのはどちらですか (弟)

25. 先に立つて計画し、人をみちびいてい
くのはどちらですか (兄)

27. 自分でできることでも、人にやつても
らいたがるのはどちらですか (弟)

32. いつもきちんとしていないと気がすま
ないのはどちらですか (兄)

35. 人に親切にしてあげるのはどちらの方
が多いですか (兄)

その結果の分布は第2図のようになった。

これで見ると、兄弟的性格差異のあらわれは、男女とも広く分布しているが、男子の方が得点の多いものが多い。

IV 兄弟的性格差異と家庭での取扱い方との関係

そこで、IIの得点とIIIの結果との関係を見ると次のようになる。

Table 1

男子 N=38 組

兄弟的性格 差異	家庭での 取扱い		計
	つけている	つけていない	
差異がはつきりしている	6	2	8
ややはつきりしている	12	11	23
殆んどみとめられない	1	6	7
計	19	19	38

Fig. 2

×……男 N=38 ○……女 N=30

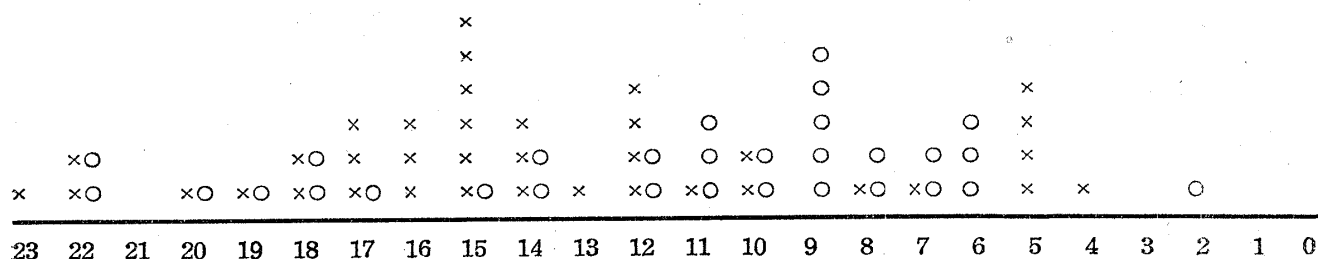


Table 2
女子 N=30 組

家庭での 取扱い 兄弟的性格 差異	つけている	つけてい ない	計
差異がはつきりし ている	8	2	10
ややはつきりして いる	2	10	12
殆んどみとめられ ない	3	5	8
	13	17	30

Table 1, 2, の各欄の頻数は取扱いに関しては Fig. 1 に於てきりのよい点数のところなるべく等分に近いように2分し, 兄弟的性格差異に関しては Fig. 2 の頻数配分が男女共直線的にほぼ3つの山にわかれているので, それに従って3分した。これに関して, 取扱いと性格差異との間の無相関を帰無仮説とし, 無相関検定法 (佐藤良一郎著「無相関検定法」昭22) によつて, それを棄却した場合の危険率を計算すると, Table 1, 2, 共に1%以下であつた。従つて家庭で兄弟的な差をつけて取扱つている度合と, E Z 対偶者間に兄弟的性格差異のみとめられる度合との間には, 危険率1%以下で正の相関があるということが出来る。

もちろん, E Z の対偶者間に見られる性格的差異のすべてを家庭における取扱い方の差に帰することは出来ない。家庭ではできるだけ取扱い上に差をつけないようにしても, 学校や社会で強いて差をつけるような扱い方をし, 両者に特殊な兄弟意識をもたせるようにしてしまう場合もある。家庭での取扱われ方と家庭外での取扱われ方のいずれが大きな影響をもつかということは, 個々の場合について考えなければならないことであるが, ともかく, この研究結果によつて, 家庭での取扱い方における兄弟の差別もまた, 性格形成に参与しているということがいえたわけである。

V 事例A群 家庭で兄弟の差別をつけているもの

家庭で取扱いの上で兄弟の差別をつけていると判定されるもので, 本人同志にも兄弟的性格差異を示す事例をあげる。

第1例 Tn兄弟 (28E Z-849)

男子ばかりの三人兄弟の長男, 次男であり, 父は建築

技師で工事現場にいて殆んど不在。家には父方の祖母と母がいるが, 二人とも特に長男であるA(兄)に対する期待は非常に強い。出生時の体重はAの方が50匁ほど重かつたが, 現在では身長, 体重ともにB(弟)の方がややすぐれている。成績は両児とも級の中ではもつとも低い方であるが, Aの方が僅かにまさっている。幼時, 二人であるので, 主としてAの面倒は祖母が, Bは母がみたので, 長男であるAに対する祖母の期待は強く, Aを兄として扱うよりは, 長男, 長兄として一家の特別な存在として立てようとする傾向が強い。母はそれほど差をつけて育てるつもりではないらしいが, 父の不在がちな家庭での祖母の存在には抗しがたく, 祖母に従っているといった態度である。又, 一家の主人がおらず, 祖母, 母の手がありあまつているため, 二人の面倒は細いところまでみすぎるくらいで, 二人とも子供っぽく, 依頼心が強くなつてしまつたと母はいつている。又, 一家の中心は子供であり, その長はAであることから, 何事によらずAは長男としてたてられ, 現在, 将来通じて, たよりにされる人間として扱われている。

これに対して, 両児とも兄弟の差別をつけて扱われていることを明確に意識しており, 又お互にAは兄としてBは弟としての意識をはつきりもつている。のみならず, いつもはお互の名前を呼び合つているが, 時にはBがAを兄ちゃんと呼ぶこともある。

兄弟的性格の質問項目においても, Aの方が控え目であることはA, B, 母三者がみとめ, 母は, おやつでもBはすぐ食べてしまうが, AはBのがあるのを確めて食べるといった思いやりもあると語つている。自制的, 指導的で, 責任感のあるのはAであり, 依存的なのは, Bであるとされている。

学校, 野尻の生活では, 両者とも, いつも接近した位置におり, 二人で組になつてふざけまわつて, エンタツ・アチャコのあだなをもらい, 人気者である。時には遊び半分であるが, 他の双生児を相手に, 二人が組でん格闘ごつこのようなことをして, 二人でお互に助け合う。非常に仲がよく, 母も二人が殆んどけんかをしないので, 特にAを兄だからといつて叱つたことはないといつている。

腕力, 喧嘩等ではBがAより強いことをお互にみとめ友人もそういうが, Bは自分がAよりまさつていことをAに気兼ねしてしまうと云うし, 又水泳なども殆んど同格であるがBはAの方が上手だといひ, Aもそれを認めるといつたように, BはAに対して一目おいてる感があり, Aはそれを当然としている。Aは小遣いなども計画的に控え目に使うが, Bは全部使つてしまい, 又A

は他人の分の食事の片づけなどもするが、Bは全然しないといった面がある。

このように行動場面では、お互に対等の関係で一緒に行動するということが多く、お互に、兄弟の意識はかなり強固に持っており、例えば、S. C. T.においても、Aは双生児であることは便利である、何故ならばおつかいを弟にやらせるといっており、Bは仕事はAがよくやってくれるといっている。

第2例 N t 兄弟 (28 E Z-844)

7人兄弟の第四、五子で、姉二人、兄一人、弟二人のまん中にいる。父は会社員であり、7人とも在学中であるので、家庭の経済状態は中程度である。出生時より現在に到るまでは、身体、成績ともに非常に類似している一対であるが、二人を比較すれば、いずれの面でもAの方が僅かにすぐれている。

兄弟が多いので、特にAに対して期待をかけているというようなこともないが、一応兄弟として区別をしている。二人の毎日の行動をみていると、どうしてもAを兄として、Bを弟として扱うようになってしまう。Bは概してのんきで、お使いなどにいつでも責任感が少く、宿題なども、母にこつそり助けを求めにくる。Aにはそういうところは少しもないので、自然Aには、大切な用事をいいつけ、又、将来いずれがたよりになるかと聞かれれば、Aということになるということである。

兄弟的性格の質問項目にも、よくこのような傾向が表われており、A、B、母三者の回答において、兄弟的差異が肯定的に表われた総点は17点で、兄弟的傾向のはつきりした一対である。三者共通して認めている性格は、Bが面白いことを言つて人を笑わせること、又反面几帳面であるということで、Aの方は指導的、責任感あり、自制的であると母もBもいつているが、A自身はそのようなことをあまり意識していないらしく、いずれともわからないとしている。

学校、野尻の生活いずれにおいても、二人は非常に仲がよく、いつも一緒に行動し、相手がいなくなると、互に、名前を呼び合う。又、野尻でBの乗っているボートが霧のためになかなか帰らなかった時には、いつも多弁なAが、顔を紅潮させて、一言もしやべらずに心配していた。Aは兄的な態度でBに用事をいいつけたり、又、Bが悪口をいつて他の双生児から責められていた時、AがきてBに代つて謝つてやるなど、兄弟的序列ができている。

このように、日常生活のごく些細な場面に、Aは兄として、Bは弟として行動し、その間に、軽い命令口調はあつても強制、高圧というほどではなく、Bもごく自然

に、Aのことをきいており、特に目立たないが自然な兄弟関係を示している。

次には、父母は出来るだけ平等にあつたつていうが、やはり、どこかに取扱上の差別があり、二人の間に性格の差異が生じている場合が多いのであるが、そのような例をあげる。

第3例 K t 姉姉 (29 E Z-932)

兄一人、妹一人の四人兄弟の長女、次女で父は会社員家庭の生活水準は中程度である。母の言によると、幼時住宅難のため幾世帯もの同居生活を続け、そのためすっかり二人がいじけて、臆病になり、いろいろなものに対して異常なまでの恐怖を示し、特に小学校の一年の時、Bが肺浸潤で8カ月休学した時には、医者器具に対して非常な恐怖を示した。小学校三、四年まで二人一緒でも満足に使にいけないかつたという。一体この母は二人の実際の状態以上に、心配しすぎているようである。

従つて二人の扱い方にも細心の注意が払われ、いつも二人を平等に、お互にひがみのないように取り扱っている。しかし二人を一緒に呼ぶ時、人に紹介する時には、Aが先であり、ちよつとしたお使いを頼むのはBであるという。本人にきくとAはやや姉として扱われているといい、Bはたしかに妹として扱われているという。お互に幾分か姉妹意識を持つていることを認めている。

兄弟的性格については、特に差があるとはいいがたいが、依存的なのはBであり、責任感のあるのはAであるとしている。又、一般的には妹的性格を示す多弁というのはAであるとA、B、母の三者が揃つて認めている。

学校、野尻の合宿を通じて、姉的、妹的行動がみられ、特に野尻では、姉妹的性格のはつきりしている一対であつた。例えばBは朝起きると、ふとんもあげず、掃除もせず、勝手に洗面にいつてしまい、同室のものからも、ボウヤ(Bのあだ名)なんにもしないの々と半ば公認されている形であるのに対して、Aは他人のふとんまで片づけ、掃除もする。そして、Bに対して、片づきなさい等と文句をいうこともない。又帰京の時の荷物整理にもAは断然主導的位置にあり、Bはその補助者にすぎなかつた。

このような生活のあらゆる面において、Aは指導的で姉らしくふるまうが、特にこの二人の姉妹関係として目立つことは、BのAに対するかなり強い依存性である。

このように母は意識的に平等に扱おうとしているにもかかわらず、二人の間には姉妹的性格のはつきりみられる点、又、母の云う二人の内気とか恐怖症などは、二回

の観察を通じて、全くみることはできず。むしろ箒を持つて立ちまわりを始め、観察者を啞然とさせるような活潑な行動を示した点など、なにか母の観察のずれを感じさせ、母の気がつかぬ面に、姉妹的取扱いもあるのではないと思われる。

第4例 Ot 姉妹 (28 E Z-873)

五人兄弟、兄一人、弟二人、女子はこの二人だけで、長女、次女である。父は銀行員、兄も銀行員で経済的に恵まれている。幼時母が弱かつたので、Aは父が主として、Bを母がみていた。出生時Aは810匁、Bは600匁でかなり差があつたが、現在では、Bの方が身長、体重ともすぐれ、知能検査ではいつもBがやや上であるが、学課の成績は大体同じで、Aの方が少しすぐれている。両児ともに級の首位をしめ、学級委員をしている。

家庭の方針として、二人に差別をつけぬように、いつも同等に扱っているといっている。しかし、幼時の入浴の順序、現在起す順、又二人を同時に呼ぶ時には、いつもAが先であり、大切な用事もAにさせている。しかしちよつとした用事などはBに、そして、母の将来の期待は、AではなくBにより多くかけられているという。(幼時に多く母が手をかけたためではないか)このように取扱いの方針としては、はつきりと無差別主義をうち出しているが、実際の扱い方や期待には、差別がつけられている。

このような家庭での取り扱いに対して、両児とも、質問紙などでは、家庭では平等に扱っているといい、お互に、姉、妹という意識もないと答えている。しかし、S. C. T., 兄弟的性格の質問、[行動観察などからも、かなり姉妹的性格差異およびAの姉としての意識がみられるのである。

兄弟的質問項目のそれぞれに肯定的傾向を示したものは、A、B、母の三者合わせて21あり、兄弟的性格差異を顕著に示すものの代表的一例の中に数えられる。特に、Aが指導的、Bが依存的、又Bが面白いことをいいこつけいであるということなどは、三者がみとめるところであり、その他、Aが控え目、自制的、Bが多弁、調子もの、快活、社交的という、一般に兄弟的性格としてみられたものをはつきりと示している。

行動観察においては、学校でも、野尻の合宿でも、お互に話し合つたりするような唯二人のみの行動というものとは全然みられず、いつも二人の間には或距離を保っており、二人とも同じ group に属していながら、個々に独立した member として行動し、二人で協力したりするような相互の交渉はみられなかつた。友人に対する態度もAは静かに話し合っていることが多く、Bは大勢の

集団の中で指導的になつてることが多い。このように現象的な行動面では二人はお互に平行、独立の関係を保っているが、Aには姉としての意識がかなり強く、Bは妹としての立場を認めるにはあまりにも自主性が強いように思われる。例えば野尻合宿で、到着早々家庭にあてた葉書には、＼長女はつ子より＼と明記し、又、S. C. T. でも、Aは、相手に対する気持として、相手がもつと自分を姉だと思つてくれれば、妹として面倒をみてやるし、犠牲にもなるのだがと書いている。これに対して、Bは、たゞ、相手がいないと困ると思う。二人は仲がわるいのですと書いているのみである。お互に自己意識が強く、Aは髪を三つ編みにしており、Bはたゞ短きつて、わけているが、お互にそのような髪が自分に似合うのだという。又、野尻合宿でもAがBに髪を結つてやりたいといい、いじるとBはいやだといつてさせなかつた。このようにAには、かなり強固な姉意識があり、Bは妹として従属的位置につくのを潔しとしない。

このような非常に強いAの姉としての意識や質問項目に表われた兄弟的性格は、二人に差別をつけていないと言いつても、家庭での取り扱いの影響を見逃すわけにはいかないと思われる。

第5例 Hm 姉妹 (28 E Z-851)

女子ばかり四人姉妹のまん中、父は車掌をしており、生活水準は中の下か、下位に属する。教育に対しては、女子だからどうしてもよいというような多少投げやりなところがみられる。出生時は殆んど同じくらい体格で、ややAの方が重かつたが、現在ではBの方がやや重い。成績は両児とも級の中の半ばからやや下で、Aの方が僅かに優っている。幼時、母は主としてAの面倒をみ、祖母がBをみたが、その祖母は現在いない。

家庭では、姉妹の区別をつけていないといっている。事実、上に姉が一人あり、四人とも女子なので、この二人に大きな期待もかけていないようであり、幼時の入浴、起す順など意識していずれを先にということではなく、その時の都合で扱われたらしい。Aを先にするのは二人を一緒に呼ぶ時だけで、その他の場面は、いずれもわからないとか、大体同じように扱っているということだが、父母ともに、AよりもBにむしろ期待をかけている。即ち、Bは性質があつさりして、腰が軽く、お使いなどよくしてくれるので、将来の期待はより多くBにかけていると語っていた。

このように家庭での扱いは同等、又はむしろBに期待されているにも拘らず、兄弟的性格についての質問では、兄弟的差異を示すものが、A、B、母の三者を通じて22もあり、もつとも差異の表われているものの一つ

である。特に、BがAに依存的であり、又面白いことを言つて人を笑わせるということ、又、Aが責任感のあることは、三人の認めるところであり、その他、几帳面、親切という項目を除いて、すべての姉妹的性格を示す項目に肯定的傾向を示している。

実際に彼等二人の間でも、姉妹の意識を持つており、特にAは、家庭の扱い方にも、姉妹の区別のあることを認めている。これに対して、Bは区別をつけられていないと言っている。

この一対は、家庭の経済事情から野尻合宿にも参加できなかつたが、学校での観察によると、二人とも比較的親密で一緒にいることが多いが、友人への働きかけは全く違い、Aは、同じ group に加わつていても、いつも大抵無言で、傍観者のようにたゞ一緒にいるだけであるが、Bは集団の中で自由にふるまい、遊びにも熱中する。学校生活のため、二人の相互関係の深い場面はみられなかつたが、母の話によると、学校に納める月謝などは、Aがする。又宿題などもAはこつこつと一人でやるが、Bは帰宅するとすぐ遊びに出て、夜になるとAのをうつすということも多いと言っていた。

このように父母の期待などは、むしろBにかけられているのに、二人の性格には、はつきりと姉妹的な差異がみられる。

以上にみられるように、兄弟的性格差異が常にかならずしも家庭の取扱い上の差別に一義的な関係をもつていとはいえないが、何等かの関係があることは認められねばならず、本人における兄弟的自覚とか兄弟的意識とかいうことについては、なおほりさげて行く必要のある点だと思われる。

Ⅵ 事例B群 家庭で全く差別をつけないもの

単に両親の供述だけではなく、実際に差別待遇をしていないと判定されるものには、兄弟的差異もほとんど見られないものがある。そのような事例をあげよう。

第6例 Y i 兄弟 (29 E Z-916)

男子だけの三人の兄弟の長男、次男である。父は会社員、母の実父は有名人で、一家は母方の実家に寄寓しているので、人の出入りが多く、A、Bともに落ちつきがないと母は言っている。出生時の体重は、Aが780匁、Bが550匁でかなり差があるが、現在は殆んどない。成績は、Bの方が全体として優つており、両兄の担任の教師は、Bの方が落ちついており、理性的であるといつて

いる。

家庭では、父母ともに、兄弟の区別なく扱おうとしており、同時に二人を呼ぶ時、人に紹介する時はAを先にするが、それ以外の時には、いつも同等に扱い、ちよつとしたお使いなどは、Bが気軽に引きうけるのでBに多くさせるといつている。母は、Aを兄として扱おうにも、どつちかというBの方が兄のようなことが多くて……と語っていたが、両兄ともに、家庭での扱い方には兄弟の差別がないということを認めている。しかしながら、兄弟意識については、Aはあまりないと言い、Bはやはり自分が弟であるということを感じると言っている。

兄弟的性格についても、質問の兄弟的傾向については否定的なものが多く、多弁、調子もの、快活という弟的性格をもつのはむしろAで、控え目、自制的、几帳面という兄的性格をもつのはBであるとしている。しかし、Aが指導的で、Bが依存的であるという傾向は、このよう一対とても表われている。

学校、野尻合宿を通じて親密である。お互に「ソー坊ク」「ター坊ク」と呼び合う。しかし単に一緒にいるということがこの上なく嬉しいというようなものでなく、相互に悪口を云つたり、けなし合つたり、又小犬のように戯れあうといった常に動的な関係をもっている。しかし汽車などでお互が無理にわけられたり、多少とも危機的な場面では、相手のことをしきりに心配する。例えば、罐づめを奪い合つて、Aが「かんきり」をふんで血を出すと、Bは早速ハンカチを持つてきて拭いてやるとか、汽車で別々の車輦にのるとAはBのことを心配し、Bはまた荷物を持つてAのところへくるというような場面がみられた。このように二人が対等の立場にあつて戯れ合うというのが、この一対の二人の関係の代表的特色であるが、時にはAが自分は兄だということもある。しかしこれは本来の兄的行動というよりも、それによつて、半ばふざけて虚勢をはっているという風に解釈した方が妥当であると思われるような行動である。水泳、集会時の社会科の勉強など、Bの方が真面目に努力する方で、Aはいつもひょうきんにふざけている。

しかしSCTでは、このような一対としても、兄弟の意識はあるらしく、相手に対する気持として、Aは、「僕のいうことを聞くようであるならば、私はいいと思う」とかき、Bは「相手がもつと兄らしくつたら私は兄と弟の区別をはつきりしたい」とかいている。その他「私は兄だから相手に対してよく……」という項目では、Aは「面倒をみてやらなければならないと思う」と書いてあるのに対して、Bは「いうことをきくようになりたい」と書いてある。このように意識としては、僅かながら

兄、弟の区別をみとめながらも、行動、又性格面からは、殆んど差がない一対である。

第7例 Im姉妹 (29 E Z-932)

長女、次女で下に妹一人、弟一人がある。家庭は酒屋で営業にいそがしく、二人は非常によく家事を手伝うようである。出生時の体重はAは 1590 g, Bは 2225 gで身長もBが4 cm も大きく、その後もBの方が発育がよく、Aは学校を休みがちであった。現在もBの方が体重、身長ともに大きく、成績もBの方がよい。

家庭では、あらゆる面にわたって、無差別主義をたてまえとして両児を扱っているようである。しかし食事、おやつを盛る順又は人に紹介する時には、Aを先にしており、二人を同時に呼ぶ時にはBを先に、又ちよつとしたお便を頼むのもBである。これは、BがAよりも体が丈夫で、しかも自転車にのれるためであると思われる。大切な用事をする時、又たよりになるのは、いつも同等であるとしている。

このような家庭の取扱いの中で、Aはあまり自分を姉として意識することはないと言い、Bは自分は妹だと感じることがあるという。(S.C.T. では否定)

実際の行動観察、兄弟的性格についての質問の結果でも、Aを姉、Bを妹としてみる傾向は少く、むしろAがBに依存しているという傾向がみられた。

兄弟的性格では、兄弟の特徴の傾向のはつきりみられる 11 項目以外であるが、「自分でできることでも人にやつてもらいたがるのは」との質問に対して、A, B, 母、教師いずれも、それはAであると答えている。その他几帳面なのはBであるとしており、Aに姉的性格を認めることはあまりできない。

行動観察では、両児とも非常に仲のよい一対で、いつも蔭が形にそうようにお互に一緒に行動している。野尻合宿では特にこのような結びつきは強く、同じようなK姉妹とともに一緒にいる双生児の典型的な一対として目立っていた。そして、このような間柄でも、二人の間では、ややBの方が指導的で、Aはこれに従順に従うことが多い。しかし又時にはAがBに何か言いつけると、Bはまたこれを容易にうけいれるのである。話題はいつもBが出し、Aがそのあとをひきうけて二人で一つのことを話し、いつも「ヨウヨウミーク」と呼び合い、一心同体のように仲のよい一対である。

S.C.T. でもこの傾向はよく表われており、Aは相手が他の人とけんかをしている時、私は自分までけんかをしているようになるという、Bは相手が悲しそうにしていると私も悲しくなると書いている。又Bの積極性、Aの消極性を示すものとして、「私達二人が、一つのこと

を競争してやる時、私は……」の項目では、Aは、「負ける」と書き、Bは「負けずにやる」とかいている。このように二人は、何事も一緒に、姉妹関係は殆んどみられず、むしろAがBをたよっている。

第8例 Nm兄弟 (28 E Z-825)

兄一人、妹一人の四人兄弟の中間にいる。父は会社員で、家庭の生活水準も中程度である。体格は、出生時から、現在にいたるまで、殆んど差はなく、成績も両児とも級のまん中くらいで、殆んど同じであるが、ややAの方がすぐれている。

家庭での二人の取扱い方は、二人を同等に取り扱おうとしている。しかし、やはりけんかの時にはAに対して兄だからやめなさいと叱り、大切な用事はAに、又現在たよりにしているのは、やはりAであるとしている。しかし又反面、二人を同時に呼ぶ時にはBを先にし、ちよつとしたお便もBに頼み、更に将来の期待はAよりもむしろBにあるとしている。このように、二人の取り扱い方はいずれとも言い難い。

このような扱い方に対して、Bは、差別をつけて扱われているとし、Aは平等に扱われているとしている。しかし両児とも、お互に兄弟の意識のあることは認めている。

更に兄弟的性格の質問では、Aが指導的であることは、A, B, 母三者ともに認めるところであるが、自制的、控え目という一般に兄の性格とされているものが、むしろBにあるとされ、多弁という弟の性格はむしろAにあるとされている。依存性についても、Aはわからぬと答え、Bはそういう傾向のあるのはAの方だといひ、母はBの方だといっている。このように、兄弟の性格の質問によつては、比較的そのような傾向の少ない部類に属する。

学校、野尻合宿においては、両児とも控え目、恥しがり、内向的な性格の類似度の大きい、仲の良い行動がみられた。しかし二人だけで遊ぶことはなく、必ず誰かと一緒に遊ぶ、けれどもそのような行動の中にも、Aの方がやや兄らしいと思われる行動も決してなくはなく、例えば、社会科の活動の一部として農家を訪問した際、Aの方が活潑に質問し、帰り道でBに聞き方についてたしなめたり、ふとんを敷く時に、こうしたらいいよとBに指示するというような態度がみられたが、いずれの場合でもAはそれほど積極的でなく、又高圧的にBに従属を命じるというようなことはみじんもない。又、上述の兄弟と比べればこのような場面は少い。全体の行動の特徴としては、お互に対等の立場で接し、常に以心伝心という感じで、二人の間の意志の疎通のもつともよい一対

であるといえる。

以上の3例では、二人の関係は対等であり、親密というか、いつも一緒に行動しており、力関係も平衡が保たれているといった感じである。いくつかの方向をもった力が、どういう場合に平衡を保つかといったことを考えてみるのにはいいような例である。

VII む す び

以上のような結果から、一応、一卵性双生児の対偶者間にみられる兄弟的性格差異と家庭における取扱い方の兄弟的差別には高い相関関係があるということができよ

う。

これは、パーソナリティー形成についての一つの要因を示す事実でもある。

むろん、パーソナリティーの形成過程を明らかにしていくためには、今後の多くの研究にまたなければならないが、それに関して、二三の示唆が、この研究の内に含まれているので、なお、その点を追求して行きたい。

本稿の資料の蒐集には東大教育学部附属学校教官諸氏の御協力を、また資料の統計的処理については、われわれの研究室の東洋君にお力添えをいただいた。

ここに謝意を表する。

ABSTRACTS

late at the open hour of the camp training. In accordance with the results of the Sociogram as will be described later, he was an isolate.

(3) Sociometric survey.

The sociometric survey was carried out on the last day of the 1st and the 2nd camp training. The formulae of question were as follows :

Among your team members,

- (1) Whom would you want to go to a tea shop with?
- (2) Whom would you want to take lodgings with?
- (3) Whom do you like best?
- (4) Whom would you like as your partner of your experiment?

Its results were as follows :

- (a) The frequency of the choice increased 0.75 for each person in the 2nd camp training, in comparison with the 1st camp training. The results may be interpreted in this way that the camp training had a good influence on the development of the human relations in team activities.
 - (b) Those who had the feeling of inferiority enjoyed a very little popularity.
- (5) The 3rd Experiment.

A study of resolving the conflicts between the academic studies and team activities.

- (1) By the results of the pre-test, it was found that all members felt, more or less, conflicts, between academic studies and team activities.
- (2) Introducing the persuasion as a means of resolving the conflicts.

The content of persuasion was as follows;

At the 1st step, the President of baseball club announced at the presence of all members of baseball team to the effect that: Even if there are some negative aspects in baseball team activities at present time, the experience of club activities will be very much helpful in the light of the whole life experiences, and it is my responsibility as the President, to worry about how to resolve the present conflicts. Therefore, you need not worry about that yourselves.

At the 2nd step, all members discussed about for an hour how to resolve the conflicts.

After the discussion was over, the survey was conducted again to discover the actual conditions of the conflicts.

It was indicated by the results that the conflicts decreased and the people's attitude towards the baseball team activities changed to a favorable direction.

ON THE RELATIONSHIP BETWEEN PERSONALITY DIFFERENCES OF IDENTICAL TWINS AND THEIR TREATMENT BY THE FAMILY

by Miki, Yasumasa and Amō, Yukiko
University of Tokyo

The authors tried to clarify in Vol. 2 No. 2 that there were some personality differences between member of a pair of identical twins (EZ). Some of these differences were reduced to those

of elder-brother-like and younger-brother-like characteristics as seen between non-twin siblings.

In Japan there is a great difference in the treatment of the child depending upon his posi-

tion in the family. In this research an attempt was made to study the relationship of the personality differences between identical twins and their treatment by the family in light of the above mentioned fact.

As the first approach the following questionnaire was made.

1. Do you treat the twin differently ?
2. Is the order in which baths are taken or the seating at the dinner table strictly followed in your family ?
3. Do you treat the elder as the superior ?
4. When they quarrel do you arbitrate or scold based on the reason that they are the older or the younger ?
5. Which did you feed first during infancy ?
6. Which did you bathe first during their infancy ?
7. Which of them do you wake first in the morning ?
8. Which do you serve first at meals and at snack time ?
9. Which do you call first when you call them at the same time ?
10. Which do you introduce first to others ?
11. Then there is an important errand to be done which one do you ask to do it ?
12. Which do you ask to perform simple errands ?
13. Which do you consult about important matters ?
14. At the present which do you depend on more ?
15. Which do you expect to be more successful in the future ?
16. Do the children feel that they are being scolded as the elder or the younger when they quarrel ?
17. Do the children feel that that they are treated as the elder or the younger ?
18. Are the twins aware that one is the elder and the other is the younger ?

Which member of the twin was treated as an elder brother by the family was determined by totaling the number of times he was named

in the following 14 items--items 1, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, and 17. The result is shown in Fig. I (x-male, o-female).

Although parents say that they treat the twins in the same manner, in reality there is a difference.

As the next step 10 items were chosen from the study which has been reported in a previous article. These 10 items were chosen because it was felt that these best differentiated between elder-brother-like characteristics and younger-brother-like characteristics.

The index of the elder-brother-like characteristic was the number of his elder-brother-like responses to these ten questions. This also applied for younger-brother-like characteristic for the younger brother. (These items were scored by both members of the twins and by the parent. The total score would therefore be 30.) The results are shown in Fig. II.

The following is taken from Fig. I and II.

Male N-38 pairs

	Family treatment differentiates between twins	Does not differentiate	Total
Difference is clear between elder and younger	6	2	8
Somewhat clear	12	11	23
Not clear	1	6	7
Total	19	19	38

Female N-30 Pairs

	8	2	10
	2	10	12
	3	5	8
	13	17	30

The correlation between the extent to which treatment by the family differs and the extent to which the fraternal personality differences of the identical twins exists is significant at the 1% level.

Needless to say the treatment by the family

is not the only factor in personality development but it appears that the treatment by the family, that is the family system, plays a role in formu-

lating personality.

In addition to the results of the questionnaires 6 case studies are reported in the article.

DEVELOPMENTAL ANALYSIS OF RIGIDITY IN OLD AGE

Murase, Takao

University of Tokyo

1. The writer of this report acknowledge the unique contribution of Lewin and Kounin's Rigidity Theory to theoretical developments of "Developmental Psychology". Having found that the behavior traits as referred to by the two psychologists as the phenomenal rigidity, are common to some behavior traits of the old, the writer tried to explain the old —the last stage of development— on the basis of this rigidity concept while endeavoring to verify the concept itself

2. The first puzzle experiment is intended to examine the degree of influence which the solution acquired in the first series of this experiment may have upon the correspondent solution in the third series as the former is considered likely to hamper the latter with declining effects.

3. The second and third card classification experiments are designed to classify the ability of the subjects to change the classification standard either by themselves or upon instruction from the experimenter.

4. This report covered in its serial experiments between 11 and 13 old age (age 63—82 and residents of an old people's home) plus 16 young subjects (age 14).

5. Following are principal findings of the above experiments :

- a. It was found through the first experiment that the old age took less advantage of solution-hints in solving the given puzzles than the young subjects.

Attention is called to the fact that the old age who used somehow or the other the solution-hints in the first series of the test did hardly pay attention to them in the initial part of the third series.

The writer's clue to this problem is as follows :

Assuming that the mental material of the subjects is rigid, it follows that they are liable to act in their immediate-mindedness without being influenced by their past experiences.

Their immediate-mindedness — a mental condition in which one is inclined to discard all preceding developments in favor of what is going on at sight — had led them to overlook the significance of the solution hints.

- b. In the second and third experiments, it was found that the old hardly changed the classification standard. Such a tendency to persevere in one method and consequently refrain from trying any other solution explains itself for the rigidity concept. In other words, the presence of rigid mental material makes it difficult for the old to re-arrange the once established whole relations of each region in accordance with situational changes.

6. It was observed that the old showed the behavior traits which answer to some extent the description given by Kounin in his study of the feeble-minded people.

7. All these findings have led the writer to